



読まな〜い!?

ドクターXの酔いどれ放言

「機嫌はいいけれど終末期医療に悩む担当医」

〈終業後、京都市伏見区の居酒屋Fにて〉

「先生、今日は何からいきますか？」

「このタクガリックって新メニューかな？ 頼んでみよか。そうなる」と今回も白ワインかな？」

「さそく白ワインが到着し、15分後にはボトルの半分が空に」

「今回も盛大に飲んでいただいて、どうぞ毒舌っぷりをご披露ください！」

「なにを言うんやキミは笑。今日は毒舌も愚痴もナッシング。仕事も楽しい人生に感謝！やわ」

「ど、どしたんですか先生？ なんか悪いものでも食べはりましたか？ それとも何かいいことでもあつたんですか？」

「数ヶ月前しつちやかめつちやかの状態で入院してきたある患者さんを担当したんよ。で、ちょっと前に何とか退院してもらったんやけど、今日がその患者さんの、退院後初めての外来診察やつてなア」

「診察はどうだったんですか？」

「退院後どっしりしてるか心配してたけど、いい意味で期待を裏切られてね。入院中見たことのないような元気な笑顔で来てくれはって、ほんまに嬉しかった」

「それはよかったですねえ。何が功を奏したんでしょうか。」

「退院して自宅で暮らすことで本来の能力が回復しはったんやと思う。まわりがアカンと決めてつけて先回りしすぎると本人の能力を奪ってしまふことがあるんやろうな」

「その、本当に素晴らしいお話だと思うんですが……。これだけだとコーナが成り立たないので(笑)。ちょこタークな裏話でもお願いできませんか？」

「そやから今日はナッシングやっつて」

「では私のほうからいいでしょうか。老齢期医療についてですが、意識のないままチューブにつながれて寝たきりになっている高齢患者さんを見るたび、何のための医療なんだろと疑問に思っんです。自分ならどういつ最期を迎えたくないと思っんですが、先生はどう見ますか？」

「治る見込みはないのに漫然と延命処置が行われている高齢者は確かに多いし、これからも増えていくかもしれへんね」

「それって本人の意思なんでしょうか？」



「本人は延命処置を拒んでいても、いざとなると家族や親族がその意に反してできることは全てやってくれたい」と言わはることも多いんよ。それまで疎遠だった親戚がこういふときだけなぜか出てきはったりもするし(苦笑)」

「どうしてなんでしょうかねえ。」

「概には言えんけど、人の生命は重いものやから情も入って、延命処置をしないでほしいという本人の意思に沿えなくなりがちやし、当人の生死を自分たちで判断できない、決められないというのが大きいんちやうかな。親戚の場合は、今まで疎遠にしてきて状況が分からへんだけに、余計に判断できなくて当人への積極的治療を主張しはるんかもしれんね」

「でも当人の苦痛が大きくなる可能性があるばかりか、医療費の問題もありますよね。」

「そつ、実際には月額数百万円の医療費が費やされてるケースも多いからね。種々の補助制度があるから、本人や家族が負担するのは月額10万円以下の場合が大半やけど、それだけに寝たきりを維持するのにどれだけ医療費がかかってくるか知らない人のほうが多いんとちやうかなあ」

「尊厳死や安楽死が認められている諸外国もあるのに引きかえ、日本ではなかなか議論が進まないのはどうしてなんでしょう。」

「それは医者側の抵抗も大きい気がするなア。患者さんの病気を治して命を伸ばすための教育を受けてきた医者にとつて、患者さんを死なすための処置や処分を行うことにはやっぱり抵抗があると思っんや」

「確かに……。」

「薬で死刑を行っている国もあるんやけど、『わが社の薬を死刑に使うのはやめてほしい』って訴える製薬会社もあるからね。人を助けるために作った自分たちの薬が人を殺すために使われるのは、たとえ合法的な行為であっても抵抗は大きいんやと思っよ。ま、リスク回避とか企業イメージとかの商業的な戦略もあるんやろうけどな」

「ところで縁起でもないですが、先生はどんな最期を迎えたいですか？(笑)」

「いや、こついつことをちゃんと考えておくのは大事なことで。こつやつて酒でも飲んでるときにポックリ逝くのが僕の理想やけど(笑)。自分何にかあつたらチューブを繋ぐのはやめてほしい」と妻にも実家にも伝えてある。本当は文面で明記しておくほうが望ましいけどな」

「私も寝たきりのまま医療費を使い続けるのは抵抗があるので、自分の意志を周りにちゃんと伝えおくれにします。」

「あとは最期まで健康寿命で過ごせるよう、食事や運動など生活習慣に気を付けながら毎日楽しく生きることやわ。それと同時に、いつ何が起るかわからないことも念頭にに入れておくこと」

「ありがとございます。お互いの健康を願つて、改めて乾杯〜！」

